

明治20年ごろから海軍が缶詰に注目

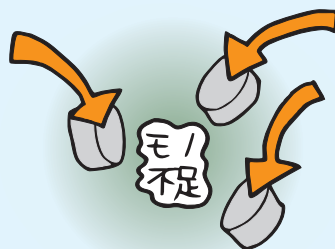
海軍の缶詰に対する注目点は、「常温での長期保存性」「即食性」「中身の多様性」「品質の均一性」「栄養価」「コンパクト携帯性」などである。後には、曜日感覚を失わないための食品としての利用もなされた(金曜日にカレー)。



明治時代の缶詰製造状況

第二期 (明治27, 8年~大正時代)

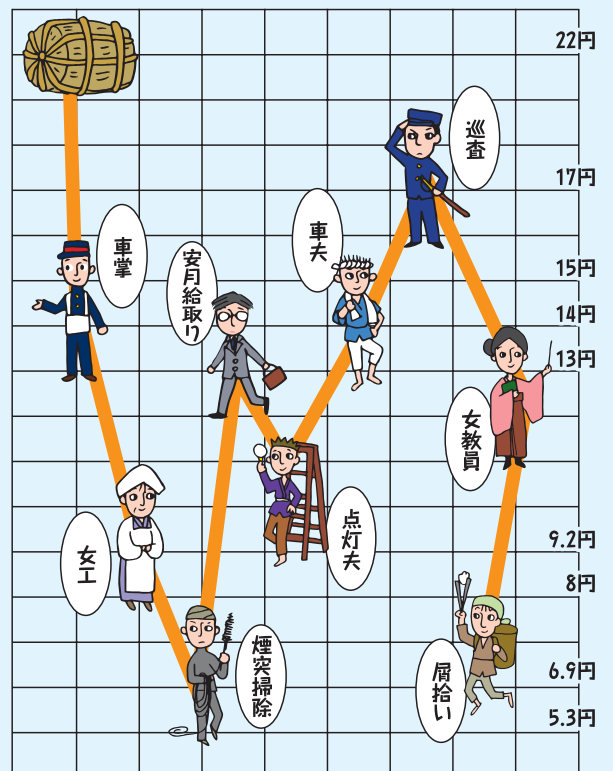
軍用食での缶詰利用とともに家庭用需要も起こる。物不足と物価騰貴(明治36年頃から)で市民の生活が困窮した。缶詰が徐々に市民の食生活のなかに入ってきた。(明治45年頃の缶詰1缶の値段は、牛肉缶25銭、サケ缶7銭程度)



缶詰普及協会設立

- ・物資欠乏を補う
- ・物価低下を図る

明治45年頃の給料の相場



軍用食として缶詰が不可欠に

日清戦争時(明治27,28年)に仕向けられた軍納缶詰は251万7,328円、明治27年生産量・4,443トン(148万5,678円)。

戦争終了で、陸軍が牛肉缶詰を払い下げ

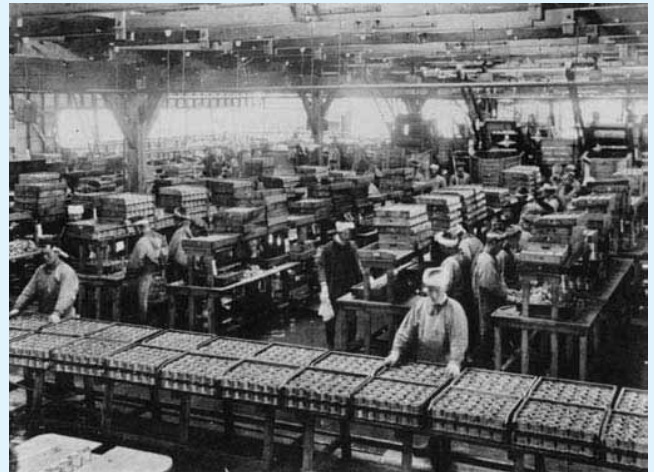
民需の勃興

明治30年生産量・1,550トン - 27年の3分の1になったのは軍需の減少。

日露戦争(明治36,7年)時の軍需缶詰は2,309万9,211円で日清戦争時の9倍強。

明治37年生産量・9,337トン、明治38年生産量・17,298トン、カムチャッカへの工場進出(明治43年に堤商会が缶詰生産開始)。

カムチャッカ産のサケ缶詰の内地販売。



サケ肉の缶への手詰工程(カムチャッカ缶詰工場)



カムチャッカ缶詰工場

大日本缶詰業連合会設立(明治38年)

国産奨励策にもって各種事業が無秩序に立ち上げられた時代で、缶詰業への参入者も相次ぎ、玉石混淆する状態になった。市場には優良缶詰に混じり不良缶詰も流通し、混乱を来していた。この状態を業者が協同して是正するために生まれたのが同連合会である。

大日本缶詰業連合会の事業には

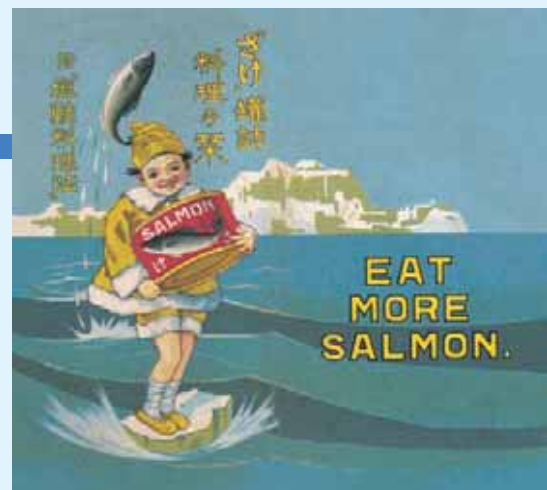
- ・缶詰試験・研究所を設置(大正11年)
- ・缶型内容量統一
- ・缶詰デーを設定して一般宣伝

などがある。

缶詰普及協会設立(大正11年、日本缶詰協会の前身)

物資欠乏を補い、物価低落を図ることを目的に設立された。不良品を排除し、品質向上を図るための事業を推進した。具体的には、次のようなものがある。

- ・市販缶詰開缶研究会の開催(業界の健康を保つために、みずから健康診断を受けるという主旨)
- ・商品への推奨マーク貼付(消費者二味方スルモノハ最後ノ勝利者ナリ)
- ・消費者への製品特性・利用法伝達



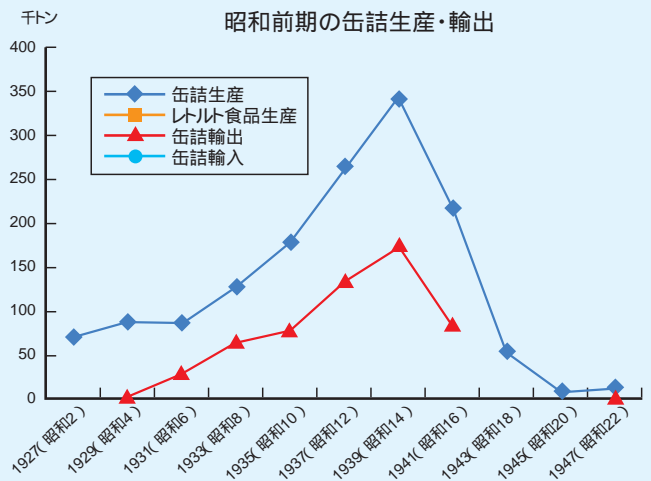
関東大震災発生(大正12年)

被災者数・340万4898人、死者・9万1344人、行方不明者・1万3275人。建物の消失・破壊、商品や資材類などの被害額は115億円余など未曾有の大災害。

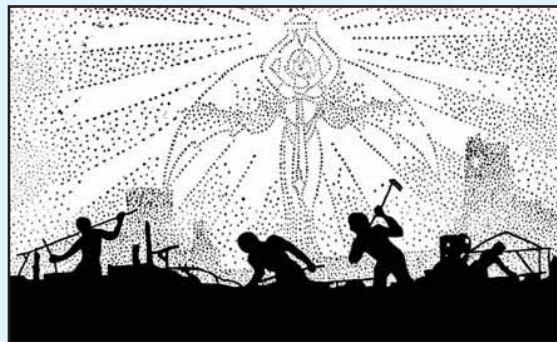
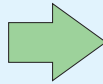
東京府下4郡への戒厳令公布、食糧確保のための非常徴発令、支払猶予令、暴利取締令、などが公布される。

救援物資として各地から続々と寄贈缶詰が送られる(5万8千函 280万個) 臨時震災救護事務局では救援缶詰をみずから配給する手段を欠いていたため、缶詰普及協会と東京缶詰同業組合が「缶詰配給団」を結成、配給にあたった。

配給品を通じて缶詰を知る人が増加し、はからずも、その後の缶詰普及の契機ともなった



関東大震災・深川倒壊家屋



復旧に努める人々のイメージ画

第三期 (昭和初年～終戦直後)

昭和2年発行の「高等小学読本 巻3」にも「缶詰」の項が設けられるなど、缶詰は徐々に消費生活に浸透していった。一層の普及を目指して、昭和2年に社団法人日本缶詰協会を設立、消費者からの信頼確保の諸対策を実行していった。

そのような折、昭和6年の満州事変に始まり、日中戦争、太平洋戦争へと進む厳しい15年を迎えることになった。缶詰は再び軍用、外貨獲得のための輸出が必要の中心となった。

「高等小学読本」に掲載された“缶詰の作り方”と“常温での保存性をもつ理由”など

